

友だちならば

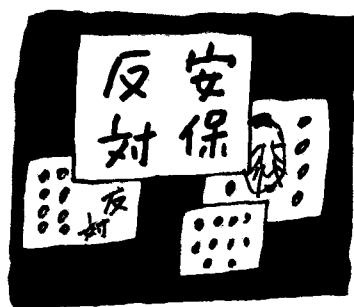
森村 桂



だ ち な ら ば

森
村
桂

講
談
社



友だちならば



1968年7月24日 第1刷発行

1974年1月24日 第16刷発行

著 者 森村 桂

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2-12-21

郵便番号 112

電話 東京 (03) 945-1111 (大代表)

振替 東京 3 9 3 0

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

Printed in Japan © Katsura Morimura 1968

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

友だちならば
目次

インドに咲く花

青い麦畑の夢

不思議な温泉

スワ、山火事！

洋行を決意

営利が目的ではありません

いざ、教えん

122

103

77

62

44

23

7

芝居は麻薬

139

女には友情がない

154

父の死のそばで

168

茉莉花の世界

183

裏切りと真実

202

安保の夜

218

さようなら、私の人

231

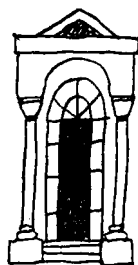
あとがき

248

装幀・カット
宮田武彦

友だちならば

インドに咲く花



「アコ、卒論のテーマ決めた？」

二年生になったある日、大学の食堂で三十円のライスカレーを食べながら、私は親友のアコにいった。

「卒論？」

そういって、アコは大きな目を、ちょっと複雑そうにしばたいた。

「モリ、私、卒論書かないかも知れないわ」

「え」

「私ね、中退するかも知れないの、二年で」

「中退？ どうして」

「彼ね、大学院出たら就職するでしょ、そしたら、結婚すると思うの」

「結婚？」

「うん、だって考えちゃった。彼もう二十六だし、結婚したって、決して早すぎないし、婚約したの去年の三月よ。彼、可哀そうで」

「……………」

「私だって、せっかく大学へ入ったんだし、勉強したいわ。でもね、結婚は一生でしょ」

「アコ、私、それは反対だわ。アコはクラスでも成績はトップよ、その人が、結婚するからって、さっと中退しちゃうなんて。そんな考えだから女子大生はアクセサリーで来るとか、亡国論とかいわれるのよ」

「でもねえ、モリ。私だって続けたいけど。あんまり婚約期間が長いと」

「アコ、ぜいたくよ、アコの年で婚約してる人なんてめったにいないわ、アコは幸せなのよ、少しぐらいがまんしたっていいわ。それに、結婚したら一生もう家庭の中よ、独身時代にこそ、やるべきことやっとかなきゃ」

「モリ、今に解るわ、モリだって、婚約したら」

アコは脂肉をスプーンでよけながらいった。

「だめよアコ、婚約したからって、自分自身のやりたいことまで捨てちゃ。アコ、勉強が好きじゃない、卒論は何にしようって楽しみにしてたくせに」

「うん、それはそうだけど」

「うちのオフクロなんか後悔してる、今でも大学行けなかったこと。そりゃあ恋愛結婚だから幸せなはずだけど。今やっきになって、講義だとか何か聞きにいったり、本ばかり読んでるわ。おかげで、お金がないのにせめて娘は大学は通わせたいって、この通り私しゃどうだっていいんだけどさ」

「いやだ、モリったら」

「そんなことだからアコ、日本女性の水準が下っちゃうのよ、第一、私が困る」

「え」

「アコ、考えてよ、あと二年、私ノート誰にみせてもらったらいいの」

「モリ」

アコがライスカレーの最後の一口を口にふくんで私をみつめた。だけどほんとに、どうして恋人たちってこう結婚をあせるんだろう、二人でしっかり信頼してればそれでいいじゃないか。私はどうも気に入らない。世の女性たちというものの、恋人が出来るとパツと変る。今まで将来何になりたいって張り切っていた人たちが、それも相当な人たちが、トロンとした目になっちゃって、

「彼がいるからいいの」

ってなる。その上、今までべったり友だちと一緒にいたくせに、婚約でもすればもうウワの空、

友だちのいうことなんかまるで耳に入らない。ただ、彼の話ばかりだ。アコだってそうだ。春休みをへだてて、アコすっかり大人びちゃって、私が真剣に話しているのに、よくぼんやりしている。結婚すればまたしかり、私の友達で高等科を出てすぐ結婚した友だちが二人いるが、「遊びにいらして」

っていうから、じゃあ行くわっていうと、

「ほんと、うれしいわ。でも、日曜と夜はだめなのよ、それに土曜日は彼いるでしょ、夕方は夕飯の仕度だし……だから……」

冗談じゃない。それじゃ、四時間目が終わってすぐ郊外の団地まですっとなで行って、

「ごめん下さい、わ、しばらく、じゃあまたね」

っていった、ボタンとドアをしめて出てこなきゃならないのか。アホらしい。こんなことしてるから、女はいつまでたっても男にいいようにされるんだ。

「アコ、私は断固反対よ」

私は食べ終ったライスカレーのお皿とコップとスプーンをつかんで立ち上った。とたん、

「キャッ!」

私は誰かとぶつかった。

「ごめんなさい」

軽くあやまって通りすぎようとした私はあわてた。その女子学生の手持っていたライスカレー

がひっくりかえって、何と、彼女の白いブラウスにカレーがどさっとかかってしまったのだ。

「ご、ごめんなさい」

「困ったわ、私、どうしよう」

彼女は途方に暮れていった。その顔をみて私はびっくりした。ちょっと色は黒いがまるで外人のような美人なのだ。

「ほんとに、ごめんなさい、どうしたらいいか……」

私もまったく途方に暮れた。彼女はいった。

「困ったわ、本当に。私、もうお金持っていないの」

「ほんとに、どうも……弁償したいけど私……」

困ったな、洗濯しても落ちないだろうか。どうってことないブラウスだけど、新しいのかな。

「お昼ぬかなきゃ」

「え」

私はびっくりして彼女の顔を見た。彼女はまったくまじめな顔で途方に暮れている。

「あの、それだけ？」

私は恐る恐るいった。

「私、三十円持ってるけど」

と、彼女はパッと顔を輝かせた。

「え、ほんと！ それ、貸してくれる？」

「勿論」

「ありがとう、ああよかった」

そういうと、彼女は私の差し出した十円玉を三つ、さっとつかむと、その手で、パッパと黄色いライスカレーの汚れをはらい、大きな黄色いしみをふりかえりもせず、食券売り場に飛んでいった。

「どうしたの、モリ」

アユがびっくりしていった。

「うん、何だか解らないのよ」

「あの方、たしか哲学科から転入して来た方じゃない。向山茉莉花さんとおっしゃる」

「へえ、転科？」

「哲学科へいらしたけど、やっぱり国文がしたいから変ったんですって」

「だって、そんなに簡単に変わるの」

「変れないわよ、転科した人はみんな一年落ちるわ、だけど、あの方だけは成績がすごく良かったから、入れたんですって。ただし単位は足りないから、二年でとり返すっていう条件で」

「ほんと。そんなことがあるの」

「知能指数が百五十四の人がいたって、入学した頃騒いでたじゃない」

「うん、そういえば、そういう人いたわね」

「それがあの方よ」

「へえ、それにしちゃ、洋服よりライスカレーのこと考えるなんて」

「ちょっと愉快ね」

「うん、気に入った」

私たちは向山さんを見た。スラリとした長身の彼女はもうすっかりさっきのことは忘れたのか、調理場でライスカレーのお皿をもらうと、満足そうに空いたテーブルに向って歩いていった。

「向山さん」

私は呼んだ。彼女は、私を見た。そして、人なつっこそうな目で、ニヤッと笑って、肩をすぼめて見せた。私は、何だか知らないがうれしくなった。

「森岡さん、ごきげんよう」

ハッと、振り返ると、女子高文芸部の後輩の片桐ゆう子、青いスーツに白いブラウスで立っていた。

「あら、大学？」

「そういえば、彼女も大学生だ。」

「ええ、国文なんです、よろしく」

片桐ゆう子は頭をさげた。片桐ゆう子とは、去年の五月、彼女のフィアンセが奥秩父で遭難

したと報告されて以来の出会いだ。あの時とは違って、少しそばかすのある顔は、いかにも健康そうに明るく輝いていた。もうボーイフレンドが出来たのだろうか、背の高い色の白いちゅっとハンサムな男の子がそばに立っていた。

「村松さんだわ、学生運動にもう入ってるのよ」

アコが私にいった。

「もう？」

だって、入学式が終ってまだ十日しかたっていない。

「そうなのよ、田中君が驚いていた。まるで大学に入ったの、学生運動が目的みたいな様子だったんですって」

「へえ、なら修学院なんか入らなければいいのに」

「お金持のぼっちゃんなのよ。何でも小金井の大地主なんですって」

「ああ、お百姓さんか。土地の値上りでもうけた」

「さあ、そこまでは知らないわ」

「でも、変ね、大地主の息子が学生運動するなんて」

「知らないわよ。モリ、直接聞いてみたら」

「まさか、そこまでのおせっかいはありません」

そうか、片桐ゆう子も立ち直ったか。よかった。後輩が同じ国文とは、やっぱりうれしい。